

34	尾道市立中庄幼稚園	23～25
----	-----------	-------

## 平成25年度研究開発実施報告書（要約）

### 1 研究開発課題

幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続を図るため、言葉の育ちにかかわる内容を重視した接続期の始期・終期の設定にかかわる研究を行うとともに、教育課程の連続性を明確化した教育課程及び指導方法及び適当な教材等の研究開発を行う。

### 2 研究の概要

幼児期の教育と小学校教育の言葉の育ちにかかわる内容を重視した接続期における始期・終期の設定にかかわる研究を行う。同時に地域の課題とされる子どもの思考力、判断力、表現力等を育む観点から小学校における「言語活動」に係る内容を手がかりにしつつ、言葉の育ちにかかわる内容を重視した「学びの連続性」を確保する接続カリキュラムと指導方法や適当な教材等の開発を目指す。

研究にあたっては、上記に関して自園と関連する協力校のみならず、市内の幼稚園とともに共同研究を実施し、市内の幼稚園、保育所や小学校へも普及・啓発を図ることとする。その際、尾道市教育委員会が深くかわり実施していくものとする。具体的には、指定地域への指導、共同研究への指導、その成果等を普及させるための市内の公立・私立等を含む幼稚園・保育所・小学校を対象とした幼保小合同研修会を実施する。

### 3 研究の目的と仮説等

#### (1) 研究仮説

##### 【研究の目的】

#### ① 幼児の育ちの現状

少子化、核家族化、情報化等の幼児たちを取り巻く環境の変化を受けて、近年の幼児の育ちについては、基本的な生活習慣や態度が身に付いていない、他者とのかわりが苦手である、自制心や耐性が十分に育っていないなどの課題が指摘されている。また、多くの情報に囲まれた環境にいるため、世の中についての知識は増えているものの、その知識は断片的で受け身的なものが多く、言葉を使って自己の考えを深めていく力が弱くなってきていることや、学びに対する意欲や関心が低いとの指摘がある。

#### ② 幼児期における言葉の育ちの重要性

言葉を使うには、日々の生活の中で思いを伝えたい、あるいは思いを聞いてみたいという相手とのかわりが必要である。そして、伝えたいこと、聞きたいことが幼児の心の中に生まれていくことが最も大切になってくる。

平成20年に告示された幼稚園教育要領では、領域「言葉」の内容(2)が「したり、見たり、聞いたり、感じたり、考えたりなどしたことを自分なりに言葉で表現する」と「考えたり」という語が挿入され、内容の取扱い(2)では「幼児が自分の思いを言葉で伝えるとともに、教師や他の幼児などの話を興味をもって注意して聞くことを通して次第に話を理解するようになっていき、言葉による伝え合いができるようにすること」が新たに加えられた。また、領域「環境」の内容の取扱い(1)では「特に、他の幼児の考えなどに触れ、新しい考えを生み出す喜びや楽

しさを味わい、自ら考えようとする気持ちが育つようにすること」という文言が加えられている。このことから、思考力の芽生えを支える言葉の育ちや聞くことから生まれる、伝え合う楽しさが重視されていることが分かる。

### ③ 幼児期の教育と児童期の教育の円滑な接続の重要性

平成22年11月1日に出された「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について（報告）」（以下「報告書」）では「子どもの発達や学びの連続性を保障するため、幼児期の教育と児童期の教育が円滑に接続し、体系的な教育が組織的に行われることは極めて重要である。」また、「幼小接続の取組を進めるには、まず何よりも子どもの発達や学びの連続性を踏まえた幼児期から児童期にかけての教育のつながりを理解するための道筋を明らかにすることが必要である。」と述べられている。

さらに幼小接続の取組を積極的に進めるための方策として、「幼児期と児童期をつながりとして捉える工夫が必要であり、幼児期と児童期の教育双方が接続を意識する期間を『接続期』というつながりとして捉える考え方を普及することが必要である」とも述べられている。

本園は、平成23年度から3年間、文部科学省より研究開発学校の指定を受け、「言葉の育ちにかかわる内容を重視した学びの連続性を確保する接続カリキュラムの研究開発」に取り組んできた。本研究では、幼稚園教育と小学校教育の円滑な接続を図るための接続期の設定を行うとともに、「接続期の教育課程（言葉）」「接続期の接続プログラム」「言葉の基盤形成にかかわる〈発達の姿〉」の作成を行った。

### ④ 言葉が育つ環境や援助

乳幼児の言葉の発達は、生活の中での親しい人とのやりとりを通して、質的にも量的にも目覚ましい変化を遂げていくと言われる。信頼できる大人との関係の中で、言葉を交わし合い、乳幼児の言葉は育まれていく。家庭でも、地域でも、幼稚園でも幼児の言葉は育てられ発達していく。それらの環境の中でも、幼稚園の特徴は、同年代の複数の幼児が集団の中で活動しながら育ち合っていくことにある。こうした園での生活では、親しい人の存在は初めは教師であるが、教師の援助を受けながら徐々に他の子供達へと変化していく。遊びの中で友達とのおしゃべりを通して、お互いが抱いているイメージを共有し、そのイメージを表す言葉を楽しく共有しながら、新たな言葉を獲得していく。そのため幼稚園では、教師が時期や幼児の発達にふさわしい環境や活動を計画的に準備し、幼児にかかわったり、友達とのかかわりを援助したりして、豊かな言葉を育てていくことが求められている。

### 【研究仮説】

接続期の始期と終期を設定し、言葉の育ちにかかわる内容を重視した幼児の発達や学びの連続性を考慮して指導方法を工夫すれば、自分の思いや考えなどを相手に分かるように話すなど、言葉による伝え合いができ、幼児期における幼児一人一人の学びの芽生えを確かなものにできるだろう。

- ① 幼児期・児童期の発達を踏まえた保育・授業場面でのエピソード、履歴等の集積・整理などを通して、言葉の育ちにかかわる内容を重視した接続期における、始期・終期を明らかにすることができる。
- ② 幼稚園・保育所と小学校との交流活動やその活動を通して見える有効性について、言葉の育ちにかかわる内容を重視した職員の合同研修を継続的に行うことにより、言葉の育ちにかかわる内容を重視した接続期カリキュラムを具体化できる。

- ③ 言語活動を手がかりにして、言葉の育ちにかかわる内容を重視した学びの連続性を確保する指導方法及び適当な教材等を開発する。そのことで、自分の思いや考えなどを相手に分かるように話すなど、言葉による伝え合いができ、幼児期における幼児一人一人の学びの芽生えを確かなものにできる。

## (2) 教育課程の特例

なし

## 4 研究内容

### (1) 教育課程の内容

#### ① 幼児期と児童期の言葉を用いる形態の違いへの着目と教育課程の見直し

「報告書」には、「幼児期と児童期の教育活動には、学びの芽生えの時期と自覚的な学びの時期という発達段階の違いからくる、遊びの中での学びと各教科等の授業を通じた学習という違いがあるものの、直接的・具体的な対象とのかかわり、すなわち『人とのかかわり』と『ものとのかかわり』という捉え方で双方の教育活動のつながりを見通しつつ、幼児期における遊びの中での学びと児童期における各教科等を通じた学習を展開することが必要である。」と述べられている。

言葉の育ちに視点をあてた幼小の円滑な接続を行うためには、幼児期と児童期において、幼児や児童が自分の求める様々な目的実現のための手段としてどのように言葉を用いていくのかということに着目することは、とても重要なことである。

岡本夏木(著)『ことばと発達』では、言葉の発達において《一次的ことば》と《二次的ことば》を区別し、双方のことばの性質を明示するため、かなり典型化した形でコミュニケーションの形態の特徴が示されており(表1)、これが参考となる。

「一次的ことば」「二次的ことば」の特徴 (表1)

コミュニケーションの形態	一次的ことば	二次的ことば
(状 況)	具体的現実場面	現実を離れた場面
(成立の文脈)	ことばプラス状況文脈	ことばの文脈
(対 象)	少数の親しい特定者	不特定の一般者
(展 開)	会話式の相互交渉	一方向的自己設計
(媒 体)	話しことば	話しことば 書きことば

※ 一次的ことば：「現実生活の中であって、具体的な事象や事物について、その際の状況文脈に頼りながら、親しい人との直接的な会話のかたちで展開する言語活動」

二次的ことば：「現実の場面を離れたところで言葉の文脈そのものに頼りながら、自分とは直接交渉のない未知の不特定多数者に向けて、さらには抽象化された聞き手一般を想定して一方的に展開する言語活動」

幼稚園では、遊びを通じた現実的な生活の場面の中で具体的状況に支えられ、親しい人との会話により、多くの言葉を獲得していく。一方小学校では、教科等による学習活動の中で、現実の場面を離れたところで表現することが求められ、しかも話す相手は親しい少数の特定者でなくクラスの皆に向けて話すことが要求されるなど、これまでの生活で獲得してきた言葉とはかなり質を異にする。

こうした違いにより、幼児が戸惑うことなく学びを連続していくためには、何よりも幼小の教師がその違いについて相互理解することが必要である。

このことに関して、「報告書」では、「幼児期の教育では、児童期における教育の内容の深さや広がりをも十分に理解した上で行われること、いわば、今の学びがどのように育っていくのかを見通した教育課程の編成・実施が求められる。」と述べられている。そのためには、年長児という狭い枠の中で検討すべきものではなく、幼稚園教育3年間を通じた保育の充実を行っていく必要がある。そのため、言葉の育ちを重要視した教育課程の見直しを行う。

## ② 接続期の設定

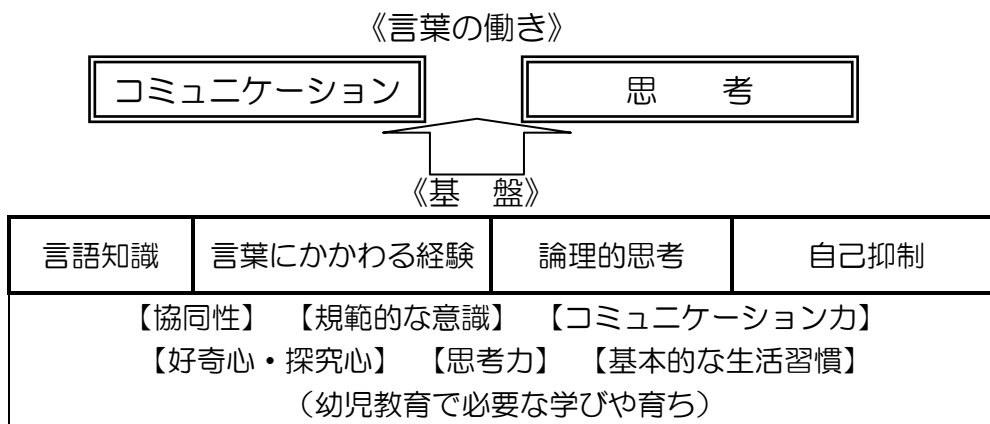
「報告書」では、「接続期」の始期・終期については、学校において適切な期間を設定して幼小接続の実践を工夫していくことが必要であることが述べられている。本園では、幼児期の学びの芽生えから児童期の自覚的な学びへのなめらかな移行を促していくため、5歳児の10月から小学校1年生の1学期終了までを「接続期」と設定し、研究を進める。

接続期：言葉の育ちでの幼稚園と小学校の段差の解消を図りつつ、幼稚園生活で培ってきた言葉の育ちが、一層豊かになるような取組を意識的に重ねていく時期

## ③ 接続期の教育課程(言葉)の作成

言葉には《コミュニケーションの道具》《思考の道具》といった二つの働きがあり、その基盤は「言語知識」をはじめ、「言葉にかかわる経験」「論理的思考」「自己抑制」も大事な基盤であることが(平成20年「言語力育成協力者会議報告書」)から読み取ることができる。

下の図は、言葉の育ちに視点をあて、幼小の円滑な接続のために幼児教育において必要な力を付けることにより、言葉の働きの基盤の芽が育まれることを表している。



こうした基盤の芽を育てていくためには、幼稚園での3年間の教育を充実していくことが必要である。そのため本園では、3年間の言葉の育ちに視点をあてた教育課程(言葉)を作成し、教師が言葉の育ちを意識しながら保育実践に努めるようにした。

## ④ 接続プログラムの作成

年長児クラスになると、友達同士で自主的に目標をもち、お互いの関係を深めながらその達成に向け創意工夫しながら活動を展開する。そうした活動を通して、友達を思いやったり、自己を抑制しようとしたりすることにより人間関係をより深めていく。また、この時期は、幼児たちの言葉によるコミュニケーション力の向上や論理的な思考も徐々に可能になってくる。こうした状況を踏まえ、クラスやグループみんなで達成感をもってやり遂げる活動を計画的に位置付けるため、接続プログラムを作成した。

⑤ 幼小交流の年間計画の作成

幼小交流は、幼児が小学校生活に親しみをもったり期待を寄せたり、自分の近い将来を見通すことができるようになる。また、児童が幼児に伝わるような言葉を使ったり、幼児へのかかわり方を工夫したり、思いやりの心を育んだり、自分の成長に気付き自信を高めたりする機会になる。

本園では、1年生と年長児・年中児の交流を年間を通して計画的に行っている。交流での1年生と幼児とのペアづくりでは、幼児の発達段階を踏まえ年中児は年間を通してペアを固定し、年長児は活動ごとにペアを変えるようにしている。こうした交流活動を意義あるものにするため、幼稚園と小学校の教師とで年間計画を作成し、継続的な交流活動を行うことにした。

⑥ 人材活用

これまで保護者の協力は、園行事での手伝いをはじめ、夏祭り等のPTAの活動でお世話になってきた。研究開発を行うにあたり言葉の重要性に関心をもっていただくというねらいのもとで保護者の方に新たに以下のことについて協力をお願いすることにした。

□毎週水曜日の読み聞かせと本の貸し出し

- ・年間を通し、3人1組で全員が行う。

□家庭での幼児の言葉のエピソード収集

- ・夏季、冬季の長期休業中（保護者からのエピソードは、教師のコメントを付けて「ことばの玉手箱」として冊子にし、提出していただいた保護者の了解のもと全保護者に配布している。）

(2) 研究の経過

	実施内容等
第1年次	<ul style="list-style-type: none"><li>・幼児期・児童期の発達を踏まえた保育・授業場面でのエピソード、履歴等の集積と整理及び学びの様相の収集</li><li>・幼児期の教育と小学校教育の言葉の育ちに視点をのこした接続期の検討</li><li>・発達や学びの連続性を踏まえたプログラムの検討</li><li>・幼稚園教諭と小学校教諭の保育・授業研究の実施</li></ul>
第2年次	<ul style="list-style-type: none"><li>・言葉の力を育てる環境構成や活動の在り方を探る</li><li>・言葉の育ちにかかわる内容を重視し、学びの連続性を確保した接続期の教育課程と指導計画の策定・改善</li><li>・学びの連続性の確保に向けた、小学校との活動の場の設定及び言葉の育ちに視点をのこした言葉の考察</li><li>・接続期の教育課程（言葉）の作成</li><li>・発達の学びや連続性を踏まえたプログラムの作成</li><li>・幼小交流の年間計画の作成</li></ul>
第3年次	<ul style="list-style-type: none"><li>・追跡調査の実施と検証</li><li>・幼稚園教諭と小学校教諭による乗り入れ保育の検証</li><li>・言葉の基盤形成にかかわる〈発達の姿〉の作成</li></ul>

### (3) 評価に関する取組

	評価方法等
第1年次	① 保育、授業及び交流場面などのエピソードを集積し、子どもの言葉の育ちについて分析し、研究の成果を検証する。 ② 運営指導委員会を開催し、大学教員や他校の教職員等より、研究開発の研究計画について指導・助言・評価を受ける。
第2年次	① 保育、授業及び交流場面などのエピソードを集積し、子どもの言葉の育ちについて分析し、研究の成果を検証する。 ② 運営指導委員会を開催し、大学教員や他校の教職員等より、第2年次の研究開発の研究計画について指導・助言・評価を受ける。
第3年次	① 保育・授業場面のエピソードを、「個の生活の充実」、「共同の生活の充実」、「協同的な遊び」の3つの視点から分析し、教育課程及び接続期の始期・終期が適当か検証する。 ② 幼稚園・保育所と小学校の交流活動のエピソードを、「個の生活の充実」、「共同の生活の充実」、「協同的な遊び」の3つの視点から分析し、教育課程が適当か検証する。 ③ 保育・授業・交流活動場面のエピソードを、教材、活動内容、指導方法が子どもの言葉に与えた影響について分析し、効果的か検証する。

## 5 研究開発の成果

### (1) 実施による効果

#### ① 幼児・児童への効果

言葉の育ちに視点をあて、幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方についての研究開発とその取組についての検証を行った。

検証方法としては、「在園児の学び」と「小学校入学後の本園修了児の学び」に視点をあて、保護者アンケート、小学校教諭（1年担任）からの聞き取り、幼小教諭による幼児・児童の学びの観察等をもとに、運営指導委員より分析していただいた。

#### 在園児の学びに関する検証

##### ■ 在園児の言葉の育ちに関する検証

3歳児～5歳児の自由遊びや一斉保育、振り返りの時間でのエピソードを集積し、本園職員による分析を行った。その結果、個々の発達の違いはあるものの着実に、言葉の育ちを見取ることができた。

##### 《3歳児》

- ・遊びの広がりとともに、遊びの中で使う語彙の数が増加している。
- ・入園当初は、「これ、わたしのだからね」に代表されるように相手に対して抗議するときに使われていた「ね」が、友達を少しずつ意識するようになり「つくってあげるね」「あっち、いこうね」といった友達関係の育ちを示す「ね」が使われることが増えている。
- ・遊びの中で「～みたい」など、これまでの生活経験での知識のイメージを草花や落ち葉や枯れ枝といった自然物に再現した言葉が使われている。
- ・友達関係の深まりとともに、友達の様子や表情を気にかけて、「どうしたん？」の声かけや、友達が休んだ時の「どうして～ちゃん やすんだん？」など、友達の思いや理由を聞こうとする言葉が使われだしている。

#### 《4歳児》

- 遊びの広がりや友達関係の深まりの中で、自分の思いを少しでもわかってもらいたいという思いが、話し言葉の文構造から読み取れる。
- 友達や教師と話す時、「ねえねえ」や「あのねー」など相手の意識を自分に向ける言葉や、「それでねー」などの言葉を使って自分の思いを長々と話すようになっている。
- 自由遊びでは、「海賊遊び」など、想像上の遊びでのイメージを共有して会話を楽しむことができるようになっている。
- 「しんせきのいとこが、きのううちにきてとまって、きょういっしょにあそびにきて、あしたかえるの」など、昨日、今日、明日といった一連の流れを順序立てて話すこともできるようになっていきている。

#### 《5歳児》

- 言葉によるコミュニケーションがかなり上手にできるようになっている。
- 「じゃー、これ、ぼくがする」など、グループで話し合う時、他の友達の思いも考えながら遊びをつくりだすための言葉の使用が多くなっている。
- 「なんで、このきのはっぱは、（あきになっても）おちんの」など、原因を知るための質問が日常生活のなかから出てきている。
- お客を案内するための掲示や遊びの仕方の掲示などに文字を使用し、書き言葉の芽生えが見られる。

#### ■「子どもの言葉の育ち」に関する保護者アンケート

幼児の言葉は、園や家庭、地域などのいたるところで育つ。そのため、家庭での言葉の育ちについて、保護者の方に記述法で調査した。

#### 《保護者の言葉の関心の高まりに関するもの》

- 親が悪い言葉を使うと子供は余計に使いたがります。自分の言葉遣いも気をつけないといけないと思いました。
- 「この言葉面白い」「こんなことが言えるようになったんだ」「こんな風に考えているんだ」と、子供の成長を知るきっかけになりました。
- おままごとのような「ごっこ遊び」が一番言葉の宝箱だと思う。その中には、普段の生活やルールがつまみついていて、おもしろい。子供の話をずっと聞いていられないのが悲しい。
- 言葉の選び方や使い方、そして意味が不明だったり、間違ったりすることもまだまだ多いですが、よく聞いてやってもっともっと話したくなるような状況にもって行ってやりたいと思います。
- 時々、子どもの面白言葉を日記に残しておくのも良いかなと思っています。

#### 《幼児の言葉の育ちに関するもの》

- 「なんでかなー」「どうしてそうなるの？」とよく聞いてきます。
- 子供の言葉から生まれてくる世界は、本当に面白く、素晴らしく、こちらまでワクワクさせられ、まるで絵本の中に入り込んだような気持ちにさせられます。
- いろいろな空想に言葉が膨らみ続けたり、突然、大人顔負けほどの現実的な言葉を言ったり、こんな言葉の使い方も知っているんだとびっくりすることもあります。
- 入園した頃に比べると、言葉の数もぐんと増えたように思います。幼稚園での出来事も家に帰って話してくれるようになりました。
- 少し前の年齢では、発する言葉といえば、ほとんどが親の話す、教えた言葉だったものが、最近では親以外の人とかかわりが増え、また、コミュニケーションも上手になったのか親の知らないうちに覚えてくる言葉の数も増えています。何より、今までは親から子へのドッジボール状態の会話が、キャッチボールに進化してとても楽しいものになっています。

## 小学校入学後の本園修了児の学びに関する検証

### ■小学校入学後の接続期での1年生（本園修了児）の姿

本園から小学校に入学した児童について、学校生活の様子について学級担任に尋ねた。小学校では言語活動を中核にすえた単元構成での授業づくりに努め、1年生ではペアでの話合いの機会を多く設けたり、教師の課題設定も児童が意欲的に参加できるように工夫したり、接続期を意識した取組を行ったりしている。こうした中で、本園から小学校に入学した児童の学校生活の様子について学級担任に尋ねた。

- 本園の修了児は、幼小交流や小学校の保護者による読み聞かせ、さらには1年生の授業参観や児童の発表会などで小学校の訪問機会が多いため、小学校の生活に慣れるのが早い。
- 休憩時間になると、自分たちで集めたいろいろな大きさの石や草花や葉っぱをすりつぶして工夫し、イメージを共有しながら、幼稚園で体験した「ごっこ遊び」を継続している姿が見られる。
- クラス皆に向けて話をするには慣れていないが、ペアやグループでの話合いには積極的に参加し、自分の意見を述べている。
- お話づくりや書くことに興味をもっている児童が多い。

### ■旧5歳児クラス担任による児童観察

児童が学校生活に少しずつ慣れ始めた6月に、旧5歳児クラス担任が小学校に出向き授業観察を行った。児童は教師の話をしっかりと聞き、隣の子との話合いも積極的に行う姿が見られた。授業の後、小学校生活について聞くと、休憩時間や給食、そして、学習のことなど、幼稚園と小学校との違う内容について生き生きと話をしてくれた。

### ■幼小の交流活動での1年生（本園修了児）の観察

本園では、幼児と児童の交流を年間通して計画的に行っている。こうした交流の中での1年生の様子について、大学の先生や幼小の教師で観察を行った。

- 交流に慣れていない児童は、ペアの幼児から離れ自分だけで楽しむ姿が見られるが、修了児は、幼児を気にかけ、幼児の思いを大切にしようとする姿が見られる。
- 3月まで園生活を一緒に過ごした安心感からか、修了児と幼児のペアでは、おしゃべりする姿が多く見受けられる。
- 振り返りの場面では、幼児の頑張ったところを皆の前で紹介するなど、幼稚園の時には見られなかった成長した姿が見られる。

### ■小学校1年生国語科での「おおきな かぶ」の初発の感想

1年生の7月に、「おおきな かぶ」の授業を行った。教師が範読後、児童が初発の感想を書いた。感想では、人物が繰り返し登場することの面白さや、「うんとこしょ どっこいしょ」のリズム感ある言葉に面白さを感じた児童が多かった。そうした中で、「わたしは、あんなちいさなねずみでも、なかまにはいればおおきなかぶもひっこぬけるんだなあとおもいました」や、「ぼくは、みんなでちからをきょうりよくしてかぶをぬいたのが、このはなしのいいところだとおもいました」の感想に代表されるように、「協力」や「小さなねずみ」の存在に目を向けた児童が4名いた。この4名の児童は5歳児クラスの時、「おおきな かぶ」の読み聞かせの後、芋パーティーで「おおきな かぶ」のお話を真似て「おおきな おおきな おいも」の話を創作し、パネルシアターを行った児童たちであった。「おおきな かぶ」で得た知識を自分たちの遊びの中に取り入れた体験が、主題に迫る初発の感想を生んだものと思われる。

授業後の感想では、クラスのほとんどの児童が協力することの大切さについての感想をもつことができている。授業の中での動作化や「おおきな かぶ」のイメージを膨らませる授業展開が子どもたちの想像力を高め、ペアトークを充実させる主体的な学びが、主題に迫る感想を導き出したものと思われる。



## ②教師への効果

### ■幼児の姿の確かな見取りと育ちに対応した教師の援助

言葉の育ちに視点をのいたエピソード集積や考察、保育カンファレンスを通して幼児の発達や学びの連続性を考慮した教師の援助を意識的に行うことができた。また、自然を取り入れた幼児自身の表現を大切に遊び込める環境構成について学ぶことができています。

発達に応じた「育てたい言葉の育ち」を育む視点で、幼稚園教諭と小学校教諭が接続期を意識した取組をすすめることで、幼児へのかかわり方、言葉による援助についてどうあるべきか試行錯誤し、活動にかかわる援助から小学校につなぐ見通しをもった指導法の工夫に努めることが出来るようになった。

### ■組織としての研究体制の確立

言葉に視点をのいた発達や学びの連続性について、方策を探る保育展開に組織として取り組むことで、教師間の連携が密になっている。保育内容や幼児のとらえ方、考察について話し合いの場が広がり、教師の言葉のありようについて幼児の姿を中心にした研修が深まっている。

### ■小学校との教育内容の相互理解

幼稚園・小学校との交流活動や乗り入れ保育・授業研究の実施を通して、発達段階に応じた教育内容、指導内容の相互理解と幼児や児童の見取りができるようになってきている。

## ③保護者等への効果

### ■園・クラス便りによる発信

日々の保育の様子を保育エピソードとして発信することで、保育内容や日々の幼児の遊び、葛藤する様子に関心が高まっている。また、エピソードの発信により、家での会話も増え、自然物や保育に必要な準備物を主体的に持って来る幼児、保護者も出てきている。

### ■園文庫・保護者による家庭でのエピソードの収集

園文庫活動における読み聞かせ活動に保護者に参加してもらうことにより、絵本を通しての幼児の言葉の育ちにかかわることができ、家庭での読み聞かせが豊かになっている。

また、家庭でのエピソードの収集からは、幼児の発する楽しい言葉や大人では気付かない発見に幼児の成長を感じ、幼児の言葉を受け止め、大切にしていこうとするなど、言葉の育ちへの関心の高まりがみられた。

## (2) 実施上の問題点と今後の課題

- 今年度開発した「接続期の教育課程（言葉）」「接続期の接続プログラム」「言葉の基盤形成にかかわる〈発達の姿〉」について、内容の充実を図る。
- 幼児期の多様な体験を通しての遊びからの学びが小学校での学びにつながる教材の開発と、環境構成、教師の援助の工夫を継続して行っていく。
- 幼小の円滑な接続に向けて、幼稚園3年間の教育はもとより、接続期における協同的な遊びをさらに充実する。

言葉の基盤形成にかかわるく発達の色

Table with columns for age groups (1-7 years) and developmental stages (1-7 years).

Main content table with columns for developmental stages (1-7 years) and rows for self-expression, social interaction, and shared life activities.

Buttons for '話す・聞く' (Talk/Listen), '書く・伝える' (Write/Share), '伝える' (Share), and '読む' (Read).

共同の生活の充実 協同的な遊び